

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 作家芥川龍之介の形成—その漢学素養を中心に

doi:10.29714/TKJJ.199903.0005

淡江日本論叢, (8), 1999

作者/Author： 彭春陽

頁數/Page： 81-98

出版日期/Publication Date：1999/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199903.0005>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



作家芥川龍之介の形成

——その漢学素養を中心に——

淡江大学講師

彭 春 陽

一、芥川の生い立ち

芥川龍之介は明治二十五（一八九二）年三月一日、東京市京橋区入船町八丁目一番地に牛乳販売業耕牧舎を経営する新原敏三の長男として生まれた。辰年辰月辰日辰刻に生まれたので、龍之介と命名されたといわれている。明治二十年代といえば、ちょうど坪内逍遙の『当世書生気質』や二葉亭四迷の『浮雲』や森鷗外の『舞姫』などの作品が発表された年代で、これらの当時の若手の文学者が頭角を現した時代である。いわゆる、日本近代文学の曙の時代である。

父四十三才、母三十三才の、二人とも大厄である年に生まれた龍之介の生後七か月に、生母ふくが突然発狂した。このため、龍之介は生母の兄である芥川道章に引き取られることになった。道章の家で育てられ、明治三十七（一九〇四）年八月満十二歳の時に、芥川家に入籍した。道章夫妻には娘が一人いたが、早死にしたので、当時子供がいなかった。この生母の発狂は、龍之介に大きな影響を与えた。彼は後に「点鬼簿」（大正十五年十月一日発行の雑誌『改造』第八卷第十一号に掲載された小説）に生母のことを次のように書いた。「僕の母は狂人だつた。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛巻きにし、いつも芝の実家にたつた一人坐りながら、長煙管ですばすば煙草を吸つてゐる。顔も小さければ体も小さい。その又顔はどう云ふ訳か、少しも生氣のない灰色をしてゐる」と。生母の発狂は龍之介の精神面に大きな影響を与え、当時の常識では発狂は遺伝的なものだと思われていたので、芥川はいつか自分も発狂するのではないかと、その狂気の遺伝を心配していた。龍之介が十一才の時、生母ふくはついに衰弱のため亡くなった。彼の母に対するイメージは「或阿呆の一生」（昭和二年六月二〇日付で久米正雄に託された遺稿であり、同年の一〇月の『改造』に発表された小説）にこう書き記されている。

二 母

狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。広い部屋はその為に一層憂鬱に見えるらしかった。彼等の一人はオルガンに向ひ、熱心に讃美歌を弾きつづけてゐた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立ち、踊ると云ふよりも跳ねまはつてゐた。

彼は血色の善い医者としよにかう云ふ光景を眺めてゐた。彼の母も十年前には少しも彼等と変わらなかつた。少しも、——彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。（後略）

また「点鬼簿」にも、「画を描いてくれと迫られると、四つ折の半紙に画を描いてくれる。画は墨を使ふばかりではない。僕の姉の水絵の具を行楽の子女の衣服だの草木の花だのになすつてくれる。唯それ等の画中の人物はいづれも狐の顔をしてゐた」と書いた。芥川にとって、生母の母親像は、こういった親しみのない、虚像としての狂人のイメージしかないのである。

芥川にいわゆる母親的な親しみを感じさせたのは、実の母でもなく養母でもなく、生母ふくの実姉にあたる、伯母のふきであつた。「文学好きの家庭から」（『文章倶楽部』大正七年一月）には、芥川は「伯母が一人ゐて、それが特に私の面倒を見てくれました。今でも見てくれてゐます。家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通点の一番多いのもこの伯母です。伯母がゐなかつたら、今日のやうな私が出来たかどうか分かりません」と言っている。父敏三が龍之介を新原家へ連れ戻そうとして、珍しい果物や飲み物を勧め、巧言令色を弄しても「生憎その勧誘は一度も効を奏さなかつた。それは僕が養家の父母を、——殊に伯母を愛してゐたからだつた」（「点鬼簿」）。しかし、芥川はこの伯母と衝突もよくしたらしい。初恋の吉田弥生に求婚しようとする芥川は、「家のものにその話をもち出した　そして烈しい反対をうけた　伯母が夜通しないた　僕も夜通しないた」と、友人の恒藤恭に話した（注1）。それから、「或阿呆の一生」には、伯母に関する項目は二つある。「三　家」と「十四・結婚」である。

三 家

彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤の緩い為に妙に傾いた二階だつた。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかった。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。一生独身だった彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだった。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しみ合ふのかを考へたりした。その間も何か気味の悪い二階の傾きを感じながら。

十四 結 婚

彼は結婚した翌日に「来勿々無駄費ひをしては困る」と彼の妻に小言を言った。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の「言へ」と云ふ小言だった。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。彼の為に買つて来た黄水仙の鉢を前にしたまま。・・・・・・

こうして当時の芥川龍之介は、これ以上ない恩義を伯母に背負いながら、多大な束縛をも感じていたのである。彼は、伯母のことを「僕の生涯を不幸にした人で無二の恩人」と書いてゐる。この伯母は「道章氏とおなじく額の広い、やや眼のくぼんだ顔立ちであつたが、少し藪にらみで、中々勝気な人であつた。その物腰なり、話ぶりなりが芝居に出て来る御殿女中を連想させるやうなところがあつた」（注2）。右の文でもわかるように片目が眇で、それが原因なのか一生独身だった。そして芥川の身の回りの世話をしていたのである。

芥川にもう一人の“母”がいる——養母の傭である。傭は幕末の大通「津藤の姪で、昔の話を沢山知つてゐます」（注3）。人柄としては、「至つて気だてのやさしい、よく物事に氣のつく婦人で、いかにも人なつこい口調で淀みなく、もの柔らかに話す人」であつた（注4）。芥川の「大導寺信輔の半生」（大正一四・一 『中央公論』）の「三 貧困」の中で、この母のことを次のように描いた。

母は「風月」の菓子折につめたカステラを親戚に進物にした。が、その中身は「風月」所か、近所の菓子屋のカステラだった。

ここの母は、養母の傭をモデルにしたのであろう（注5）。つまり、古風で、優しくて、家計のやり繰りに苦心する女性である。

芥川は生母の発狂により、生後七ヶ月で芥川家に引き取られ、子供のいなかった道章夫妻や伯母に寵愛されていたのである。その義理を背負ったのか、実父の実家へ逃げて来いとの勧誘には乗らなかった。ついに、明治三十七年に得二を生んだふゆ（芥川の叔母）を新原家に入籍することを条件に、龍之介を芥川家の養子として、正式に養子縁組を結んだのである（明治三十七年八月芥川が満十二歳の時）。そこで、この叔母ふゆが、龍之介の実父の後妻であることから見れば、彼の事実上の“継母”になったわけである。しかし、この四人目の“母”は、前の三人ほど、龍之介の成長に影響を与えなかったのである。

このように、四人の母を持っている龍之介が他人より四倍の母性愛を受けたのだらうと思ったら、それは大間違いである。却ってそれと正反対で、彼は普通の子供より四倍の神経を使わなければならなかったのである。どの母にどのような振る舞いをすれば可愛がられるかということを、幼い心で常に考えざるをえない羽目になっていた。

芥川龍之介の漢文素養はどのように培われたのであろう。まず、彼の家庭教育から見てみよう。

前述のように、龍之介の養家芥川家は由緒のある旧家であり、養父道章をはじめ養母傭および実際に龍之介の面倒を見ていた伯母フキは、みんな教養人であった。そのため、小学校に入った龍之介は学校の勉強の外に、英語と漢文と習字の学習にも通わせられた。『追憶』（『文芸春秋』大正一五・四～昭和二・二）の「学問」の項に次の記述がある。

僕は小学校へはひつた時から、この「お師匠さん」の一人息子に英語と漢文と習字とを習った。が、どれも進歩しなかった。唯英語はTやDの発音を覚えた位である。それでも僕は夜になると、ナショナル・リイダアや日本外史をかかへ、せつせと相生町二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。It is a dog——ナショナル・リイダアの最初の一行は多分かう云ふ文章だつたであらう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に残つてゐるのは何かの拍子に「お師匠さん」の言つた「誰とかさんもこの頃ぢや身なりが山水だな」と云ふ言葉である。

相生町二丁目に住んでいる「お師匠さん」という人は、芥川家の一中節の師匠だった、宇治紫山のことである。龍之介は宇治紫山の息子大野勘一に、英語・漢文・習字を習ったのである。それから、「小学校へはひつた時」というのは、明治三十一年（一八九八年）に

江東尋常小学校に入学した時点を目指すのではなく、多分高等科一年に進級した明治三十五年（一九〇二年）、龍之介が十一歳の頃だったであろう。少年芥川の漢文勉強の嚆矢と見られるこの学習について、本人がそれほど評価しなかったけれども、漢文への開眼という点で見れば、とても重要な意味を持っている。

二、中国文学との接点

小学校の頃の龍之介は、体が弱かったせいか、学校で同級生の杉浦誉四郎にいじめられたことがある。「追憶」（『文芸春秋』大正一五・四～昭和二・二）にこう書いた：「（杉浦は）隣席にゐたから何か口実を拵へては度々僕をつねつたりした。おまけに杉浦の家の前を通ると狼に似た犬をけしかけたりもした。（これは今日考へて見れば Greyhound と云ふ犬だったであらう。）僕はこの犬に追いつめられた揚句、とうとう或畳屋の店へ飛び上つてしまつたのを覚えてゐる」。しかし、芥川はいじめられるばかりではない、級友をいじめたこともある。大島敏夫という、芥川よりも頭のおおきい同級生がいて、芥川は「気の毒にも度たび大島を泣かせては、泣虫泣虫とからかひしものなり」と自白している（「学校友だち」『中央公論』大正一四・二）。

小学時代の芥川龍之介の学校成績は優秀であった。作文も上手だった。それから小説をたくさん読むようになった。読むだけでは満足できなかったのも、同級生たちと『日の出界』という回覧雑誌まで出して、多くの文章を書いた。このころから文学的な才能の頭角を現し始めた。

明治三十八（一九〇五）年四月、芥川は東京府立第三中学校に入学した。旧友たちと、『曙光』や『碧潮』などの回覧雑誌を出している。在学中友人と槍ヶ岳に登ったことがあり、このとき文章に書いたもの（「槍ヶ岳に登った記」）が後日の「槍ヶ嶽紀行」（大正九・七、雑誌『改造』に発表）の底本となった。この時期の重要な作品と言えば、『東京府立第三中学校学友会雑誌』第十五号に掲載した「義仲論」が挙げられる。この論文は文語体で木曾義仲を論じたものであった。義仲のことを「彼は所詮野生の児也。区々たる縄墨、彼に於て何するものぞ。彼は自由の寵児也。彼は情熱の愛児也。而して彼は革命の健児也」と述べた。つまり、芥川は木曾義仲の真相を突き止めようとするよりも、自分の夢を義仲に託しようとするのである。このように、彼の描いた義仲像が「歴史その儘」でな

いことは芥川が後に作家になったときに抱懐した歴史小説観を予示していると見てよいであろう。

明治四十三（一九一〇）年、中学校を卒業し、成績が優秀だったため、無試験で第一高等学校第一部乙類（文科）に入学した。ここで、久米正雄・恒藤（旧姓、井川）恭・菊地寛・松岡譲・石田幹之助・成瀬正一・山本有三など、芥川が将来作家として育つのに大きな影響を与えた人々と出会った。その中で特に恒藤（井川）恭との親交が目立ち、よく午前の授業と午後の授業のあいだの昼休みの時間に、人生や芸術などの問題について熱心に論じあった。それから、「（寮で）寝食、起臥を共にするようになったので、おのずと私（恒藤）は芥川と行動を共にする機会をより多くもつようになった。上野の不忍池のあたりや小石川の植物園などにいっしょに散歩したり、時には食堂の賄い方でこさえてもらった竹の皮包みの弁当をたずさえて武蔵野の辺まで足を伸ばしたりした」（注6）。一高時代の芥川はまじめな学生だったらしい。「めったに欠席するようなことはなく、毎日の授業時間に几帳面に出席したものであった」（恒藤恭「青年芥川の面影」）。

この時期の読書については、まず明治四十三年六月二十二日山本喜誉司宛の手紙に、

冷笑と漱石近什と六人集とを御覧に入れる 雨の音をきゝながら読ンでくれ給へ本も喜ぶだらう六人集の中でアンドレエフの「霧」はうまく書かれてると思ふ 読者をして読者自信の生活を顧させる力があるやうな気がする

アルツイバーセフの「妻」もいゝ

バリモントも面白かつた 全編を通じて伏字が多いのには恐れる、冷笑を僕が好むのは云ふ迄もない、漱石近什の中では夢十夜を最も愛すね 殊に第一夜と第六夜と第七夜がいゝ 最屢ぐくりかへしてよんだのは三冊の中で漱石近什だった

芥川龍之介は友人の山本喜誉司に『冷笑』と『漱石近什』と『六人集』を推薦し、特に漱石の「夢十夜」（明治四一・七～八）に傾倒し何度も読み返したという。この感銘は後のたくさんの作品に大きな影を落としたのである（注7）。そのほか、アンドレーエフ（一八七一～一九一九）のような、ロシアの若手の作家（それも厭世的な作品を書くような作家）に惹かれたことも、芥川龍之介の性格を象徴的に示すものにしたように思われる。それから、明治四十三年七月三日恩師の広瀬雄宛の手紙に、借りた『DIMINUTIVE

『DRAMS』を読んだところで、「THE AULIS DIFFICULTY」が最も心を惹くと書いた後、

今日朝来微雨独座して許丁卯の詩集を繙く一味の暗愁の霧の如く人に迫るを感じ候殊に其懐古七律の如き格調痛哀李義山に比すれば更に微、温飛卿（注、「卿」の誤り）に比すれば更に麗、青蓮少陵以降七律を以て斗南第一人の名ありしもの誠に偶然ならず候

と、許丁卯の詩集を読んだ感想や、李義山や温飛卿などとの比較を付け加え、漢詩の鑑賞力と博識を恩師に示そうとする箇所が注目される。また、明治四十四年五月二〇日山本喜誉司宛の手紙に、「この頃は枕の草紙が大好になつて耽読してゐます 俊成の女と清少納言とは、日本の女流作家の中で大好きな人になりました、紫式部はよんだことがありませんけれども、この二人ほど好きになりさうありません」と『枕草子』を薦めた。しかし、この時期（明治四十三年～四十四年）の芥川は何と言ってもロシア文学に夢中になっていたのであろう。ドストエフスキーの似顔絵を書いたり（注8）、友人同士でロシア訛りのあだ名をつけあつたりする（注9）ほどの有り様である。それから、中学校の友人西川英次郎や中原安太郎・中塚癸巳男・木本守治・長島武・神山与男たちとの三泊四日の御岳方面の旅行について、次のように描いている。

青梅街道の□川から石畑までは草の長く生えた人通りのない道で所々に散在する潤葉樹林の外には目を障るものもない原でした ゴゴルのタラスブルバの中にあるステツプの叙景も思出されます この原を僕たちの通つたのは彼はしらしら明けて 小雨のそぼふる中に遠い村の鶏の声が聞え 道ばたの鐘草のうす紫や薊の白いのが 薄暗い中にも 漸見え出しました、殊に此近傍の村々が羽村と云ひ、拝島と云ひ福生と云ひ小作と云ひ皆ロシア——あの麻の花の香のするなつかしいロシアの訛を帯びてゐるのがうれしいではありませんか（中略）

青梅の淋しい町 多摩川の白く濁つた水 さうして御嶽の杉林の夕暮——桑畑の中を走る汽車の窓にはルーチンがなつかしい思出にふけてゐるでせう 樺林の路をゆく女はエレンかもしれません そしてあの刈麦の畑のはてにある藁葺の中には、サモワルの音を立てる傍でステツプのリヤが酔倒れてゐるやうに思はれます、けれどもプーシ

キンは——レルモントフは——ツルゲネフは——ドストエフスキーは——トルストイ
は——ゴリキーはどこにゐるのでせう（注10）

芥川龍之介の眼前には現実の景色とロシア文学の中の風景とが織り混ざり、作品の中の人物が出て来そうな、ロシア的の田園風景が浮かび上がっていく。それから、ロシアの作家の名前の羅列。ここで芥川龍之介のロシア文学への最真が伺われる。では、なぜロシア文学に心を惹かれたのであろうか。その理由はいろいろ挙げられるだろうが、第一には近代の西洋の文学の中で、ロシア文学ほど当時の「日本の読書階級に影響を与へたものはありません」（「露訳短編集の序」昭和二年三月）という当時の風潮が理由としてあげられようし、また知人宛の書簡に「北方ロシアの白樺の林はツルゲネフに獵人日記の雄篇を齎したステツプの藍花の香はゴゴルにタラスブルバの中のある美しい紋景を齎した」（注11）と書いているように、ロシアの作家の作品の中の自然の雄大さや美しい紋景に感銘を受けたことも理由としてあげられよう。しかしそのほかに、芥川龍之介の心を強く引き寄せる何ものかがあると思われる。

明治四十三年九月、一高に入った芥川龍之介は心の中に一つの悩みを秘めていた。それは山本喜誉司との交友関係である。九月十六日の山本宛の手紙に、「正直な所を申せば僕は君の四囲にある人に対して嫉妬を感じ候、僕の君を思ふが如くに君を思へる人の僕等のうちに多かるべきを思ふ時此『多かるべし』と云ふ推察は『早晚君僕を去り給はむ』の不安を感じしめ此不安は更になしき嫉妬を齎し来り候」と書き、このかなしき嫉妬は「僕をして淋しき物思に沈ましめ候 かゝる物思のさびしさは此頃になりてはじめてしみじみ味はひしものに候」となり、それからその淋しさの中に熱いものが絶えずに燃えているという。そしてついに「あゝ僕は君を恋ひ候」とまで告白した。その恋なるものは「君の為には僕のすべてを抛つを辞せず」ほどのもので、すべての友人や先生に背いても、自分の自由を捨てても構わないのである。つまりそれは「僕は君によりて生き候君と共にするを得べくんば死も亦甘かるべしと存候」ほどの激しい恋である。しかしこう告白する一方、「恐らくは 僕のおろかなるを晒ひ給ふ事と存候」と不安をも感じていた。このように同性愛に悩まされている芥川龍之介は大量のロシア文学を読み、その中から安らぎと生き方を求めようとするようになったのであろう。なぜならそれは今まで読んで来た日本文学や中国文学の中になかったものだから。

けれども、ロシア文学に突き込んでいけばいくほど、それは芥川龍之介を厭世的に走ら

せてしまう結果となった。レルモントフの「自分には魂が二つある、一は始終働いてゐるが一つは其働くのを観察し又は批評してゐる」のを読んで、芥川龍之介自身も自己が二つあるような気がしてならない。そうして一つの自己はもう一つの自己を絶えず冷笑し侮辱しているような気がするという。自分が意気地のない無価値な人間だとさえ思った。詰めた所は“死”であり、「何度も日記に『死』という字をかいて見たかしのれない」というところまで追い込まれた（注12）。その後の芥川龍之介の、山本との同性愛傾向は恒藤恭らの一高同級の友達と親しく付き合うようになってから、それほど問題にはならなくなったが、一方彼の厭世的な傾向はずっと心の深層に残って、作品の底流となり、また彼の最後の自殺とも結び付くといえることができる。

さて、内部に煩悶を抱いたまま、芥川龍之介は明治四十五年を迎えた。この年に初めて恒藤恭にも年賀状を出した（多分恒藤恭との最初の文通だったと推測される）。山本への思いを少しずつ恒藤へ移入しつつあったと見える。四月になって、山本との関係を正常に戻したかったと見え、「一昨年の九月にあげた手紙は破るか火にくべるかしてくれ給へ」と山本に頼んだ（注13）。読書もロシア文学から脱出し、明治四十四年（一九一〇）にノーベル文学賞を受賞したベルギーの劇作家メーテルリンクの夢幻劇「青い鳥」を二日で読んでしまったり（注14）、英国の画家・詩人ロセッティの詩集の序に「超自然な事のかいてある本は何でも耽読した」という言葉に同感を示したりした（注15）。それから、七月二十日恒藤恭宛の手紙（全文英語）で、Yusenkutsu（『遊仙窟』）という中国の幻想小説を読んだという。作品の中の fairyland（桃源郷）に憧れ、そこで下品なこと、醜いことなどを何もかも忘れて、男と女の世界の生活ではなく男神と女神の世界の暮らしをしてみたいという。そのほか、米国の詩人ロングフェローの詩（多分『ハイアワサの歌』であろう）を読んで、中に出てくる幽霊はあんまり感心しないと言った（注16）。日本のものでは『稲生物怪録』や『比叡山天狗の沙汰』・『本朝妖魅考』などを読んだ。こういうふうには、厭世的な傾向による、現実社会から逃れたい芥川は、日本・中国・西洋など古今東西の怪奇・幻想的な書物を探して耽読し、自ら fairyland を作り上げようとした。

子供のころから、怪談や奇談に興味を示した芥川龍之介は、こういう経緯で明治四十五年に怪奇・幻想的なものへの関心をもう一度燃え始め、友人にミステリーの話をもとめ（注17）、それに本で読んだものを加え、「椒図志異」というノートを作成した。

以上述べてきたことをまとめてみると、高等学校時代前半期の芥川龍之介は、もっとも

親交のあった友人山本喜誉司と別れ別れになったため、落ち込んでいた。中国の漢詩では彼のこういう心境を癒すことができなかったのか、芥川龍之介はロシア文学に走った。そのため、厭世的になった。しかし、高等学校の後半期からは『遊仙窟』などの中国幻想小説の影響で、一転して現実離れの怪奇に興味を持つようになった。厭世主義も怪奇趣味も、作家芥川龍之介の形成に大きな役割を果たしている。

三、中国古典の情痴小説の影響

一高の卒業試験中、芥川龍之介はまだ英文科へ行こうか外の科へ行こうかと迷っていた。七月第一高等学校を卒業した（二十七人中二番、一番は恒藤恭）。結局、芥川龍之介が東京帝国大学の英文科に進み、恒藤恭が京都帝国大学法学科に入ることになった。恒藤が京都に行く決めてから、芥川は長い手紙を書き送った。「愈々君が京都へゆくとなつて見ると、自分は大へんさびしく思ふ。時としては悪み、時としては争つたが、矢張三年間一高にゐた間に一番愛してゐたのは君だつたと思ふ」と山本喜誉司の時と似たような告白をしたのである。しかし、少し違うのは、芥川龍之介は恒藤を良き友としてだけではなく、良きライバルとしても見ているのであった。一つ例を挙げると、第一高等学校二年の時、寮に入ったばかりの芥川龍之介は、ある日散歩から部屋へ戻り、恒藤恭の机のうえにある白い本を見た。何げなく開けてみると、それはフランス語のメーテルリンクであった。それまで恒藤がフランス語ができることを知らなかった芥川はショックを受け、不快を感じた。その後数日に亘って、彼はその刺激で何冊かの本を読んだのであった（注18）。芥川の負けず嫌いな性格の現れである。

卒業後の芥川龍之介は暫く横文字から離れ、中国の古典小説に没頭していた。『虞初新誌』や『剪燈新話』や『五才子書』や『金瓶梅』などのような「古ぼけた」本であった（注19）。大正十年発表の小品「奇遇」（『中央公論』掲載）の題材はこの『剪燈新話』の「渭唐奇遇記」であるほか、「雑筆」（『人間』大正九・九～一二）の「痴情」の項で、「『金瓶梅』程の小説、西洋に果してありや否や。」と書いた。この『金瓶梅』は先の『遊仙窟』と共に猥褻の本として中国では“禁書”扱いにされていた。すでに『西遊記』や『水滸伝』から卒業し、これらの「恋愛小説」、或いは「情痴小説」に興味を持ちはじめたということとは、芥川龍之介が男女間の情欲について考えはじめたという事実を物語っている。

大正二年八月十一日山本喜誉司宛の手紙に、芥川龍之介は結婚観について、次のように書いた。「僕には結婚が“二個の being の醜い結合”とも“corps of love”とも考へられない（中略） 結婚と云ふのは宇宙に存在する二の實在が一体になる事を云ふのだ（中略） 二實在が一体をなす為には先其間に愛がなければならない（僕は性欲と愛とを同一とは考へない）次いで其間に円満な理解がなければならない」と言い、つまり二人の間は“愛”と“理解”がなければならないという考え方である。だから、山本へのアドバイスは、第一に「愛さない女はもらふな」、第二に「自分を理解する事の出来ない女をもらふな」である。理解については、「理解し得る得ないは女の教育程度の如何にあるのではない 女の頭のいい、悪いにあるのではない（全然之によらないとも云へない 少なくとも教育程度の如何が理解に関係するより頭の善悪が理解に関係する方が遥に多いと思ふ）自分のと同じ心の傾向を持つてゐるかどうか 自分と同じ感情を持つ事が出来るかどうかにあると思ふ」と説明する。それから本気にそう思ったのか或いは冗談で書いたのか、「一度嫁に行つた女はいけない 別れたのでもつれあひがしんだのでもその男の幽霊がついてゐるからね」と書き加えた。つまり、結婚するなら、やはり初婚の女性と結婚したほうがいいと考えていた。なぜなら一度嫁に行つた人は、離婚の場合でも、夫に死なれた場合でも、前の男のイメージがついているからいけないと説いた。

芥川龍之介のこういう恋愛観に影響を与えたものに、西洋文学の存在も無視できない。

これまでの芥川龍之介の西洋文学の読書について、既にロシア文学者たちや、ミステリーな作家たちについてちょっと触れたが、ここにそれ以外の作家たちと芥川龍之介との関連性について述べてみようと思う。

芥川龍之介が英訳で読んだ最初のフランス小説は恐らくフランスの自然主義作家であるドーデ（Alphonse Daudet 一八四〇～一八九七）の『サッフオ』であろう。大正二年八月十二日浅野三千三宛の手紙に、「早いものにてはじめてロータスシリーズと云ふ紫色の本にて DAUDET の SAPHO をよみしより四年たち候」と書いているので、逆算すれば大正二年の四年前は明治四十二年で、芥川龍之介が中学五年の時であつた。また、「仏蘭西文学と僕」（『中央文学』大正十・二）で芥川龍之介は「僕は中学五年生の時に、ドオデエの『サツフオ』と云ふ小説の英訳を読んだ。勿論どんな読み方をしたか、当てになつたものではない。まあ好い加減に辞書を引いては、頁をはぐつて行つただけであるが、兎も角それが僕にとっては、最初に親しんだ仏蘭西小説だつた。『サツフオ』には感心したか

どうか、確な事は覚えてゐない。唯あの舞踏会から帰る所に、明け方の巴里の光景を描いた、たった五六行の文章がある。それが嬉しかった事だけは覚えてゐる。」と述べている。ドーデを読んだ時期は先の書簡とほぼ一致している。芥川龍之介のドーデへの関心はその後もずっと続いていたらしい。大正八年五月二十九日と六月十七日の日記にドーデを読んだという記録を残している（「『我鬼窟日録』より」）。

イギリスの耽美的芸術至上主義者であるワイルド（Oscar Wilde 一八五六～一九〇〇）は詩人であり、小説家であり、また劇作家でもある。芥川龍之介は「愛読書の印象」（『文章倶楽部』大正九・八）に「中学を卒業してから色々な本を読んだけど、特に愛読した本といふものはないが、概して云ふと、ワイルドとかゴーチエとかいふやうな絢爛とした小説が好きであつた」と言うように、かなり早い時期からワイルドを読んでいた。大正元年七月二十一日山本喜誉司宛の自筆絵葉書にワイルドのアフォリズム「THE MYSTERY OF LOVE is greater than that OF LIFE」と書いた。また、大正二年八月十二日浅野三千三宛の手紙で、ワイルドのことについて次のように述べて、後輩の浅野に読むようにと推薦した。

九月迄気楽に且読み且遊ばるゝがよかるべく候サロメをかきたる WILDE に DE PROFUNDIS (from the Depth) と云ふがあり BALLADS OF READING GAOL の詩と共に獄中の感想記に候へども INTENTION と称する ESSAY を集めたるものと共に WILDE の思想をやるには最よろしかるべくたしか丸善にも中西屋にも一志の版が来てゐると思ひ候僕も五年生のときひろひよみし事ありて “The final mystery is oneself” など云ふ句に UNDERLINE したる本を未だ蔵して居り候小説には ‘PICTURE OF DORIAN GRAY’ と称する代表作 ‘柘榴の家’ ‘HAPPY PRINCE’ の所謂土耳其絨氈の如く愛すべき御伽噺有之 PLAY にも ‘LADY WINDERMERE (綴り怪しく候)’ ‘S FAN’ ‘IDEAL HUSBAND’ ‘WOMAN OF NO IMPORTANCE’ などの傑作有之候詩も前記の BALLAD の外 ‘SPHINX’, ‘RAVENNA’ など有名に候帰京後でよろしくばどれでも御貸し申し候赤き鉛筆で印をつけし分は皆一志の版が出て居り候他は独逸の HAMBURG か何かで（事によるとライブチヒカもしれず）出てゐる二麻克の本と英国の五志版とありし様に思ひ候十志ばかりの上等の本もあるやうに候 PICTURE OF Dorian Gray は美しき描写と皮肉なる警句にみち居り ‘A fine countenance is a more precious gift than a genius.’ ‘I like acting, for acting

is more real than life.' など云ふ句も此中にあったと思ひ候

ワイルドの代表作「ドリアン・グレーの肖像」・「ウィンダミア夫人の扇」・「理想の夫」・「サロメ」・「幸福な王子」など、殆ど網羅している。ワイルドへの関心は「サロメ」の観劇を一つの頂点に達していると見ていいと思う。大正元年十一月十一日、芥川龍之介は一高のクラスメートの恒藤恭と久米正雄と石田幹之助と一緒に、横浜のゲーティ座で英人アラン・ウिल्キイ一座が演じた「サロメ」を見に行った。翌日の夜、イギリス海軍のミノトウル艦のオーケストラが加わった「サロメ」を再び見て、かなり興奮したようだ（注20）。芥川龍之介は後にこの観劇のことをもとに、「Gaiety 座の『サロメ』」を書いた（『女性』大正十四・八）。観劇で感激を受けた芥川龍之介は、ワイルドの戯曲だけではなく、彼の詩とか、小説とか、童話などにも興味を示すようになった。また、小説を読むときに、その「美しき描写と皮肉なる警句」に魅せられ、なかんずく「皮肉なる警句」に感銘を覚え、暗記するまで至った。芥川龍之介のアフォリズムを考察するとき、ワイルドは欠かせない存在であろう。

高等学校卒業の時点で、芥川龍之介はスウェーデンが生んだ世界的文豪ストリンドベリ（Johan August Strindberg 一八四九～一九一二）について既にかんりの知識を備えていた。同じく前出の浅野に当てた読書アドバイスの書簡でストリンドベリの作品や英訳・獨訳の版本をこう紹介した。

Strindberg も '債鬼' '伯爵令嬢ユリア' '死の舞踏会' '父' '母の愛' 'Swan white' 等の劇 'Blue Book' 'Legend' などの散文も英訳せられ居り候へども到底獨訳に及ばず候 D'annunzio は '死の勝利' をはじめ '薔薇のロマンス' '百合のロマンス' '柘榴のロマンス' と称せらるる小説九冊の英訳(HEINEMANN の版と PAGE の版とあり候)成りし筈なれど僕は半分ばかりか読まざる為確な事は云へず候へど読みし分('死の勝利' '生の焰' '犠牲' '巖上の三処女' '逸楽の子')の英訳あるは確に候其外妹兄間の恋愛をかける'死せる市' と云ふPLAY 'フランチェスカ ダ グミニ' と云ふフランチェスカの悲恋をかける MELODRAMA の英訳有之猶 GIOCONDA の英訳もある筈なれど之は今品切の由に候この作者の作も獨訳の方がずっと沢山出て居り候

かなりの玄人ぶりである。この強烈な個性と鋭敏な批判精神の持ち主に対する芥川龍之介

の傾倒の様子は、「あの頃の自分の事」（『中央公論』大正八・一・一）で、「読んだ本の中で、義理にも自分が感服しずらなかつたのは、何よりも先ストリントベルグだつた。その頃はまだシェリングの訳本が沢山あつたから、手あたり次第読んで見たが、自分は彼を見ると、まるで近代精神のプリズムを見るやうな心もちがした」と述べ、ストリンドベリに深い共感を示した。芥川龍之介は生涯にわたって、ストリンドベリを追究しつつ、晩年の芥川龍之介は作品の中でストリンドベリの生活を自分の生活と照らし合わせ、自嘲的な調子のもが多い。例えば、「僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの『伝説』を見つけ、二三頁づつ目を通した。それは僕の経験と大差のないことを書いたものだつた」（『歯車』の「三夜」）とか、「それから部屋の中へひき返すと、脊の低いランプの下に『痴人の告白』を読みはじめた。が、二頁も読まないうちにいつか苦笑を洩してゐた。——ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない嘘を書いてゐる。・・・」（『或阿呆の一生』の「二十五 ストリントベリイ」）などである。もっとも後者は吉田精一氏が指摘したように、それは芥川龍之介が女友達との密事の露見を予防するために、彼女らに悟らせようとするプレテクストだったのであろう（注21）。結局、果たして芥川龍之介の計算どおりで、彼の多くの女友達は彼からの手紙を公表しようとしていない。

それから、大正二年九月五日藤岡蔵六宛の手紙で、「東京へかへつてから何と云ふ事なくくらしした罪と罰をよんだ四百五十何頁が悉心理描写で持ちつてゐる一木一草も hero の心理と没交渉にかゝれてゐるのは一もない従つて plastic な所がない（これが僕には聊物足りなく感ずる所なのだが）其代りラスコルニコフと云ふ hero のカラクタアは凄じ程強く出てゐるこのラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節—ヨハネ）をよむ scene は中でも殊に touching だと覚えてゐる始めてドストイェフスキーをよんで大へんに感心させられたが英訳が少ないので外のをつゞけてよむ訣には行かないで困る」と『罪と罰』の評を書き送って、ドストイェフスキーへの関心の深さを示している。

芥川龍之介は以上に述べた西洋文学を精神の糧としながら、興味本位で中国の『金瓶梅』などの「情痴小説」に興味を持ち続けた。例えば、大正五年一〇月十九日に石田幹之助宛の書簡で「Obscene Book は外になかつたら 石印の一番やすい金瓶梅を買つて来てくれ

給へ」と頼んだり、大正七年十一月二〇日に西村貞吉宛の手紙で「金瓶梅を始め痴婆子傳、紅杏傳、牡丹奇縁、燈蕊奇僧傳、歡喜奇觀などの淫書をよむとどうも支那人の開化した野蠻性が面白くなつて来る上海の本屋でああ云ふ淫書が澤山出てゐるらしいがもし上記の外のものがあつたら送つてくれ給へ金は大金でない限り送るから」とお願いしたりしたことがある。更に、大正一〇年三月二十六日に、中国旅行へ出発する途中、大阪から澤村幸夫に次の手紙を送った。

拜啓 支那の本中楊貴妃の生殖器なぞの事を書いた本と云ふのは何と云ふ本ですか御教示下されば幸甚ですなほそんな本で面白いのがあつたら御教へ下さいませんか僕の知つてゐる誨淫の書は金瓶梅。肉蒲團。杏花天。牡丹奇縁。痴婆子。貪官報。歡喜奇觀。殺子報。野叟曝言。如意君傳。春風得意奇縁。隔簾花影等です以上

さて、芥川龍之介はかくのごとく、中国の古典文学を読み、さらに自然主義だの、耽美派だの、ニヒリズムだの、アフォリズムだの、いろいろな西洋の近代文学思潮に接し、また深く理解し、それから鴉外や漱石、荷風、藤村などをも読み（注22）、それによって自ら近代作家としての土台を作り上げたのである。。

注

（注1） 大正四年二月二十八日 恒藤恭宛の書簡。

（注2） 恒藤恭『旧友芥川龍之介』。

（注3） 「文学好きの家庭から」、『文章倶楽部』 大正七年一月。

（注4） 恒藤恭『旧友芥川龍之介』。

（注5） しかし、恒藤恭はこの箇所を否定的に見ている。つまり、これは芥川の虚構である。なぜなら、芥川の養母は決してそのようなトリックを弄することができるような人柄ではないのと、「風月」のカステラは独特の舌触りと風味をもっていて、普通の菓子屋のカステラでごまかせるような種類のものではないからだと説明している。それから更に恒藤恭氏は、「勤儉尚武」を教え、「古い一冊の玉篇の外に漢和辞典を買ふことさへ、やはり『奢侈文弱』だった」という大導寺信輔の父親像と、一中節を低唱することを趣味の一つとし

ていた芥川の養父道章の実態とは、全く違った肌合いの父親であったと言いながら、「大導寺信輔の半生」における幼少年のころの芥川龍之介の真実のありかたの混合量は約二十五パーセントくらいしか占めていないと指摘している。（「青年芥川の面影」、『近代文学鑑賞講座 第十一巻芥川龍之介』角川書店 昭和三十三年・六・五）

- (注6) 恒藤恭「青年芥川の面影」、『近代文学鑑賞講座 第十一巻芥川龍之介』角川書店 昭和三十三年六月五日。
- (注7) 佐々木充氏の指摘によると、芥川 の 作品の中で、「死相」（未定稿、執筆は中学の最高年級から高等学校の初年級までの間と推定）・「饒舌」（小説、初出不祥）・「南瓜」（小品、大正七・二・二四、『読売新聞』）・「窓」（小説、大正八・二推定）・「着物」（小説、初出不祥）・「沼」（小説、大正八・五・一、『新潮』）・「東洋の秋」（小説、大正九・四・一、『改造』）・「寒山拾得」（草稿、大正六年ごろの執筆）などが漱石の「夢十夜」の影響を受けているという。佐々木充「龍之介の裡なる漱石——小品という《散文》をめぐる——」（『文学』岩波書店、昭和五六・七）。
- (注8) 明治四十三年八月五日、神奈川県相州高座郡鵠沼村の別荘より山本喜誉司宛の自筆絵葉書に、ドストエフスキーの似顔絵を書き、「A T H D O S T O E I W S K I」と付け加えた。
- (注9) 明治四十四年七月十八日、山本喜誉司宛の葉書で、御岳方面の旅行を報告しながら、周りの風景があまりにもロシアの匂いがするので、「僕たちが互に西川はHidejiroitch中原はMasutaroin 中塚はKishiov 木本はShujika 長島はBuvna 神山はTomo-ov 僕はRiunosky と渾名をつけあつた」と書いている。
- (注10) 明治四十四年七月十八日、山本喜誉司宛葉書。
- (注11) 明治四十三年九月一日、西村貞吉宛絵葉書。
- (注12) 明治四十四年？月十一日（年次推定）、山本喜誉司宛手紙。
- (注13) 明治四十五年四月十三日、山本喜誉司宛手紙に「最後に御願がある 一昨年の九月にあげた手紙は破るか火にくべるかしてくれ給へ どんな事を書いたか今になって考へると殆取留めがない さぞ馬鹿々々しい事が書いてあつたらうと思ふ 何となく気まりが悪いからどうかしちやつてくれ給へ 切に御

願する」と書いた。

(注14) 明治四十五年四月十三日、山本喜誉司宛手紙に「マアテルリンクの Blue bird をよむだ 二百四十頁を二日で読んだのだからNOよむ気になつたんだから面白さがしれると思ふ」と書いた。

(注15) 明治四十五年七月十六日、恒藤恭宛の手紙に「ろせつちの詩集の序に彼は超自然な事のかいてある本は何でも耽読したとかいてある 大に我意を得たと思ふ一笑 時々ろせちをよむ 願くは此詩人のやうに純なる詩の三昧境に生きたいと思ふ」と書いてある。

(注16) 大正元年八月二日、藤岡蔵六宛手紙。

(注17) 七月十六日に恒藤恭宛の手紙に「MYSTERIOUSな話しがあつたら教へてくれ給へ」とあった。また、八月二日藤岡蔵六宛の手紙に「Mysteriousな話を何でもいゝから書いてくれ給へ」と書いた。

(注18) 大正二年七月十七日、恒藤恭宛手紙。

(注19) 大正二年七月二十二日、藤岡蔵六宛手紙。

(注20) 恒藤恭「青年芥川の面影」、『近代文学鑑賞講座 第十一卷芥川龍之介』角川書店 昭和三十三年六月五日。

(注21) 吉田精一「芥川龍之介の人と作品」、『近代文学鑑賞講座 第十一卷芥川龍之介』角川書店 昭和三十三年六月五日。

(注22) 鴉外について大正二年八月十九日広瀬雄宛の手紙にこう書いた。

ぶらうにんぐの代わりに鴉外先生の「分身」「走馬灯」「意地」「十人十話」なぞよみ候皆面白く候へども分身中の「不思議な鏡」走馬灯中の「百物語」「心中」「藤鞘絵」意地の「佐橋甚五郎」「阿部一族」十人十話の「独身者の死」最面白く中でも「意地」の一卷を何度もよみかへし候

それから、他の書簡で漱石の「夢十夜」とか（明治四三・六・二二、山本喜誉司宛）、荷風の享楽主義とか（明治四五・四・一三、山本喜誉司宛）、藤村の『破戒』とか（大正二・八・一二、浅野三千三宛）、当代作家に関心を示し、彼らの作品を読んだ形跡が伺える。

参考文献

- 佐藤 春夫 『芥川君を憶ふ』 『改造』 昭和2・9
- 竹内 真 『芥川龍之介』 大同館書店 昭和9・2・8
- 吉田 精一 『芥川龍之介』 三省堂 昭和17・12・20
- 恒藤 恭 『旧友芥川龍之介』 朝日新聞社 昭和24・8・10
- 宇野 浩二 『芥川龍之介』 文芸春秋新社 昭和28・10・5
- 和田繁二郎 『芥川龍之介』 創元社 昭和31・3・25
- 海老井英次 『近代文学鑑賞講座 第十一卷芥川龍之介』 角川書店 昭和33・6・5
- 大塚 繁樹 「中国の色情小説及び怪奇小説と芥川龍之介」 『愛媛大学紀要』七卷一号
昭和37・1
- 進藤 純孝 『芥川龍之介』 河出書房 昭和39・12・20
- 森本 修 『芥川龍之介伝記論考』 明治書院 昭和39・12・20
- 内田 百閑 『私の「漱石」と「龍之介」』 筑摩書房 昭和40・5・20
- 三好 行雄 『芥川龍之介論』 筑摩書房 昭和51・9・30
- 森本 修 『新考・芥川龍之介伝 改訂版』 北沢図書出版 昭和52・4・10
- 竹田 晃一 「《聊齋癖》の系譜」 『解釈』二十四卷十二号 昭和53・12
- 神田由美子 「芥川龍之介と中国」 『目白近代文学』第一号 昭和54・6
- 海老井英次 『芥川龍之介論攷 一自己覚醒から解体へー』 桜楓社 昭和63・2・25
- 関口 安義 『芥川龍之介関いの生涯』 毎日新聞社 平成4・7・10